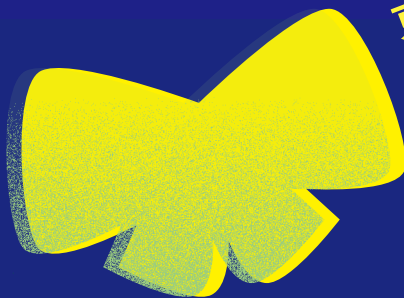
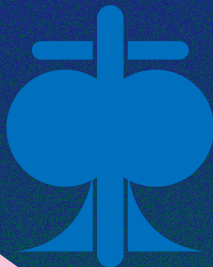
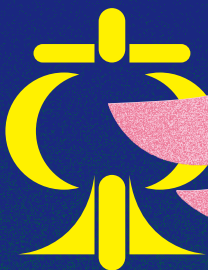


東京東浅草の家

TURN LAND

プログラム 2025





間合いを

味わう時間。

結構な

お手舞いぞ。

TURN LANDでは、

アーティストと福祉施設が協働し、

日常の中に、人と関わるきっかけを

つくる活動を行っています。

PRELAND2年目となる

東京東浅草の家でひらかれているのは、

手の動きや表情でやりとりする

会話のような「お手舞い」。

手を近づけて、離して、止まって。

手の温度や間合いを感じ合う

静かで濃密なやりとりが

いつもの空間に舞っています。


I N F O R M A T I O N M E M B E R S

# 手の会話 「お手舞い」の創造 OTEMAI

今年度は身体の動きを軸に、手の動きと距離だけで気持ちや気配を伝え合う「手の会話」に取り組みました。利用者・職員・アーティストがペアになり、体験と振り返りを重ねながら、言葉では共有しづらい小さなリズムや反応を少しずつ分かち合っていきます。うまく分かり合えない瞬間も含めて、まるごと受け止めながら過ごすこと。その積み重ねが、表現するよろこびと、関係の“ほどよいしなやかさ”を日常の中に育てていきました。

## グループホーム 東京東浅草の家

東京東浅草の家は、台東区にある地域密着型の高齢者介護施設です。館長の八木を中心に、利用者一人一人の生活に寄り添いながら、既存のレクリエーションの枠を超えた新しい表現やコミュニケーションの可能性を模索しています。



**大西 健太郎**  
Kentaro Onishi

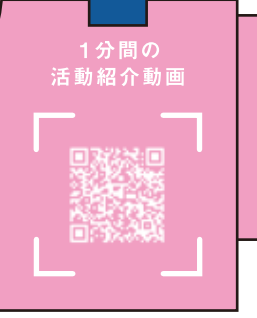
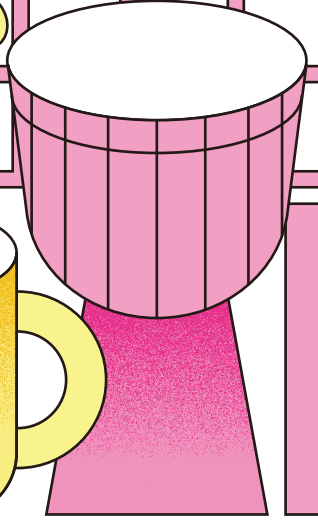
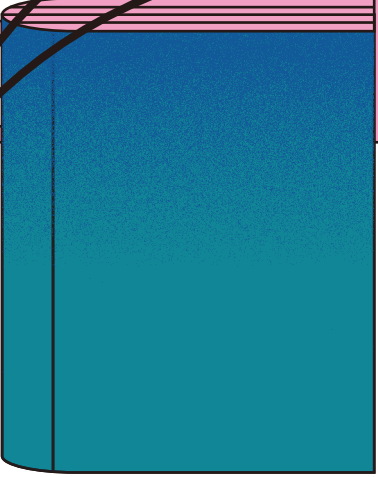
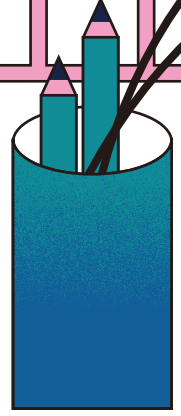
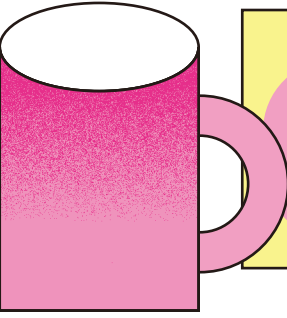
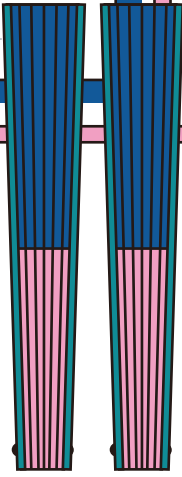
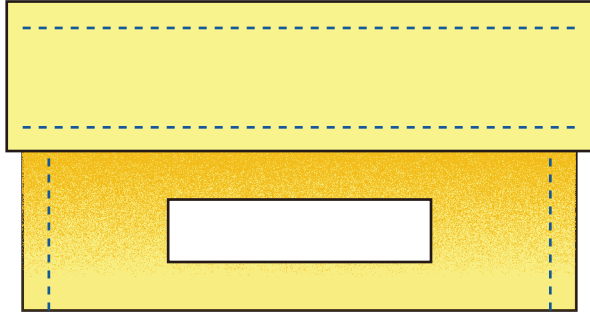
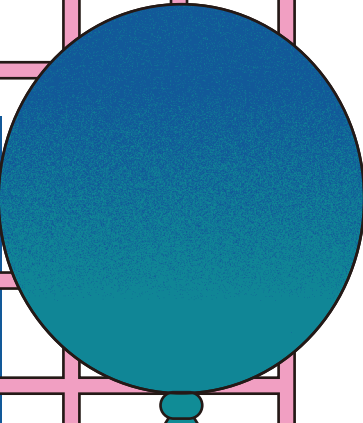
身体表現やダンスを軸に活動するアーティスト。場所や人との対話から生まれる「踊り」を大切にしており、福祉施設や公共空間など、多様な現場で人々の身体が開放される時間を共創によって作り出すワークショップなどを展開している。

photo: Ayaka Umeda



TURN LANDプログラム事務局  
一般社団法人  
**谷中のおかって**  
Yanaka no okatte

多様な人々がアートプロジェクトを運営する際の伴走サポートや、より多くの人々が個々のアーティストの世界観に出会い協働できるような状況をつくるチーム。



# お て ま い 舞

O T E M A I

アーティスト、施設の職員、利用者の皆さんとの交流がその場の特性を活かしたアートプログラムをつくりあげます。

ができるまで

6月

## 企画会議

大西が手での踊りを提案し、館長の八木と、職員や利用者はどう伝えるか、どんな工夫をすれば実現できるかを話し合った。

7月

## 利用者と初実施

館長と大西が見本を示し、ペアになって手で会話するように促した。間合いを楽しめるように、大西が音で参加し「合の手」を入れた。



息を合わせて。

8月

## 準備体操を追加

職員による手遊びやリズムワークをプログラムの前に行う習慣ができた。戸惑う利用者には寄り添い、職員と利用者2人の3人1組で取り組むことで、手による「会話」を浸透させた。



ペアになって「手の会話」にチャレンジ



のれんがひらり。

10月

## 暖簾や蝶、扇子を追加

体の外側の空間に意識を開き、多方向からの働きかけに反応できるように、微細な風で動く薄い紙の暖簾を作り部屋に設置。風を送る扇子や、空間を舞う蝶の差し金も導入した。

9月

## 「手の会話」を重ねる

体での表現を受け止め合う練習を重ね、振り返って感想を聞くことを繰り返した。目や耳に頼りすぎず、体の感覚を使うように、棒や風船を使つてのワークも取り入れた。

11月

## 「お手舞い」が完成

非言語のやり取りに慣れ、音や視覚的演出を楽しむ余裕もでてきた。暖簾を扇子で仰ぎ、手の会話を覗き見るゲーム性も加わり、全員が渾然一体となって「踊り」を盛り上げた。



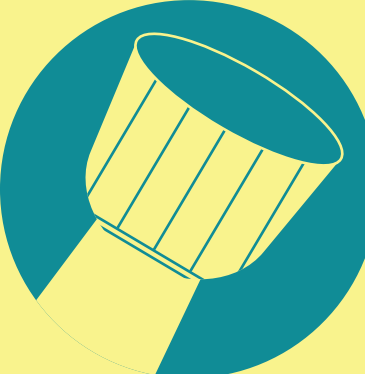
蝶々がひらひら。

扇子でパタパタ。

言葉を越えた

# 対話

に心がはずむ



相手に合わせて動きを少し変えてみたり、間合いを探りながら止まってみたり。言葉がなくても、目線や呼吸、手の温度が返事になり、自然と会話が続いていきます。

棒、扇子、風船などの道具や、太鼓やハーモニカなどの楽器を取り入れたことで、手の動きに「風」や「弾み」が生まれ、リズムや距離感のバリエーションがひろがりました。



OTEMAI

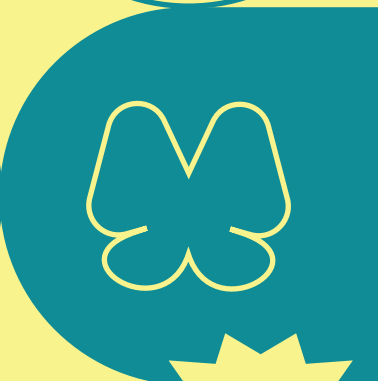


うまく伝えるより、相手の手の反応を受けて動きを返すおもしろさがありました。道具が「やってみたい」を後押しし、ふだんは前に出たがらない人が、ペアで披露する場面も。緊張より好奇心がはずむ時間になりました。



各ペアが順番にみんなの前に立ち、その場で生まれた動きを披露。見守る側も拍手やうなずきで応え、場全体で静かな一体感が育っていきました。

踊りになってきた!



利用者  
にとって

言葉に頼らず、自分のペースでつながれた

非言語の関わりが無理のない参加を可能にし、安心できる繋がりを出。アーティストに必要とされる実感や、仲間との新たな交流のきっかけにもなりました。

アーティスト  
にとって

関係を生む身体言語の可能性を深めた

進め方を工夫することで参加のハードルが下がり、反応が自然に立ち上がることを確かめられました。やりとりの中で動きが生まれるプロセスを大切に、施設の日常に根ざした表現のあり方を探る実践となりました。

職員  
にとって

一緒につくる側へ、関わり方が広がった

利用者と同じ目線で参加することで、普段とは異なるコミュニケーションや場の一体感が生まれました。日常の支援場面では見えにくい反応や距離感に気づく機会にもなり、関わり方を見直すヒントが得られました。



大西 健太郎  
(アーティスト)

### 「至近距離での濃密な舞い」

職員さんたちが普段から培っている技術・目線を活かしたい、空間の狭さなど、都市で育む活動ならではの魅力に変えたい。そんな思いで、大草原でのびのびするのはまた別の、豊かな舞いを目指しました。普段動かない足が動いた時の轟くような感動を皆さんと分かち合えたことが印象に残りました。

### 「ありがたい」

こんな貴重な体験はできない。感謝。

東京東浅草の家 利用者

### 「出会い直すきっかけになった」

こんなこともなければ同じ建物に住んでいたって話さないから、名前を覚えるきっかけになりました。

東京東浅草の家 利用者

### 「学びの仲間が増えた」

館長は「身体言語」という言葉を美大出身の利用者から学び、手のデッサン画像で職員とイメージを共有したそうです。アーティストの着想を起点に立場を超えて教え合い、職員も協働するプロセスを通じて、全員が共に学び合う仲間へと変わっていきました。



TURN LAND  
プログラム事務局

### 「相手がいるからやる気になる」

ペアでやってみて初めて名前を覚えていないことがわかったり、知っていても相手までは気にしたことがなかったり。手のワークを通じて改めてみんなと出会い、戸惑いや分からなさからくる苛立ちを抱えながらも、相手がいるからやってみようとなれたのが良かったです。



八木 実知雄  
(東京東浅草の家 館長)

# MEMBERS' COMMENTS

### 「大西さんは面白い人」

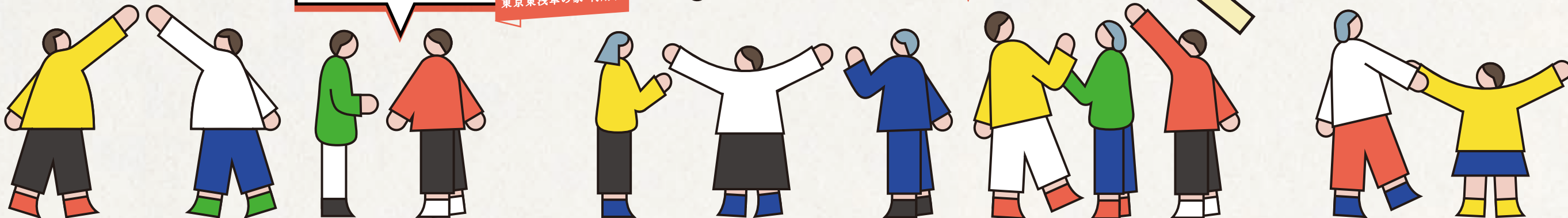
大西さんの目は狂気です。すごい目力で迫ってくるから活動中寝てられない。何がしたいのか、少しずつわかってきました。

東京東浅草の家 利用者

### 「他の場所でもやるべき！」

言葉を超えて、世代を超えて楽しみながら新しいことに挑戦できるので、日本で福祉を学ぶ外国人や学生たちにも有意義な学びを提供できるプログラムだと感じた。

東京東浅草の家 利用者



# TURN LAND

## ってなに？

福祉施設などを拠点に  
アートプロジェクトを行う  
文化事業です。

### 誰がやってるの？

東京都、アーツカウンシル東京、一般社団法人谷中のおかってが  
共催する事業です。東京都内にある福祉施設や福祉事業所を拠点に、  
その施設に出入りする人々（職員や利用者、その家族や地域協力者など）と  
プロジェクトチームをつくり、力を合わせてアートプロジェクトを  
企画・運営します。

### どんなアーティスト？

音楽やダンス、演劇、映像、手工芸など  
表現のジャンルはさまざま、その場に関わる人々との  
コミュニケーションを楽しみ、交流を通じた  
新たな手法開発に前向きな姿勢がある。

### なぜアート？

共創型のアートプロジェクトでは、  
「作品」をつくるだけではなく、  
そこにいる人々と「アートなひととき」を  
つくることができます。  
これは文化のアウトリーチでもあり、  
医学的ケアを超えて、誰もが「人」として  
社会参加できる文化的な時間をつくる  
挑戦です。

### なぜ福祉施設でやるの？

障害のある方々が落ち着いて  
時間を過ごせる環境  
(設備や習慣、人との関係)がある。

個々の障害特性と向き合うことで、  
障害をこえて一緒に楽しめる  
プログラムが開発できる。

さまざまな理由で文化施設などに  
行くことができない  
障害のある方たちにアートを届ける。

主催：東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団  
アーツカウンシル東京、一般社団法人 谷中のおかって  
発行：2026年3月25日  
アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）  
※営利・非営利を問わず、当資料のコンテンツを許可なく  
複製、転用、販売など二次利用することを禁じます。

